

胃ろうを入れて長生きしている祖母の時間

歯科医師・塩本仁美

植田先生 大変興味深いご講義を拝聴させていただきありがとうございました。
私は東京医科歯科大学を2016年に卒業し、現在開業医をしている塩本仁美と申します。

在学中は戸原先生より、摂食・嚥下分野について教えていただきました。
学生の頃は、「飲み込みができない」の意味がわかりませんでした。自身の祖母がパーキンソン病になり、飲み込みができなくなってきた経験や、歯科医師になり訪問診療のバイトをして特養に定期的に診察しに行く中で、飲み込めない方々の現実を目の当たりにし、やっと理解できたように思っています。

祖母の嚥下障害は現在もあるものの、高齢であることから、食べる楽しみを優先した方が良いのでは、という話し合いのもと、施設での食事介助をお願いしておりましたが、誤嚥し救急車で搬送され、その後胃ろうになってしまいました。

さらに悪いことに、食べていなかった期間が長かったせいで歯列も舌側に倒れ込んできてしまい、上下が全く噛み合わなくなってしまいました。そのため、これから食べさせることはますます不可能になってしまい、楽しみがないままベッド上で天井を見つめているという状況です。

医療者ではない人にとって、口が開いたままになり乾き切った口をもつ高齢者の存在はどうしても、想像しにくいのだと思います。叔父が非医療従事者のため、祖母の老いや寿命を受け入れきれていないので、話し合いの際に延命以外の選択肢を許してくれることはありませんでした。いつかまたもとの元気な祖母に戻ってくれると信じてやまないようでした。

結局、胃ろうを入れて長生きしている祖母の苦しみの時間は、叔父にとって祖母の死を受け入れる時間になったのかなと理解しています。

医療技術が発達し、なかなか「死ねない」からこそ、医療的に生かされてしまった高齢者の現状を、より多くの人がある必要はないか、と私も思っております。

先生の摂食・嚥下の授業についても、拝聴してみたかったです。今後とも何卒よろしく願い申し上げます。 塩本仁美